

クリスチャン民権政治家 加藤勝弥没後100年

旧山北町板屋沢生まれで、若くして自由民権運動に関わり、クリスチャン民権政治家として国会議員通算8期、国会議員通算3期務めたほか、教育者、実業家としても活躍した加藤勝弥(1854-1921)の没後100年を記念したシンポジウムが16日、村上市教育情報センターで開催され、基調講演とパネルディスカッションでその生涯をたどり、後世に伝えるべき功績などを考えた。

記念シンポジウムのテーマは、「先人の偉業 今村上はどう生かすか」。市民ら約50人が聞き入った。

基調講演は、山形県小国町にある基督教独立学園高校元校長の鈴木孝二氏(60)＝新潟市北区＝、勝弥の七男の長男(孫)で、近代史学者の加藤祐三氏(65)＝東京都文京区＝の2人。

パネルディスカッションは板屋沢出身で、同シンポジウム実行委員代表の五十嵐信氏(66)がコーディネーターを務め、講演者2人に、加藤勝弥が中心となって新潟市に創立した「北越学館」ゆかりの敬和学園大学(新発田市)の山田耕太学長(67)、村上歴史研究会会員の加藤亨氏(65)＝村上市北中＝が加わって行われ

旧山北町板屋沢出身 教育や実業界でも活躍 その偉業 今どう生かすか

孫も来場 村上でシンポジウム



パネルディスカッションで登壇した4人。左から加藤祐三氏、山田耕太氏、加藤亨氏、鈴木孝二氏。＝16日・村上市教育情報センター

た。その中の3氏の発言の概要は次の通り。

山田耕太氏 加藤勝弥が多大な資金を投じて開校した北越学館は、26歳で教頭に就任した内村鑑三がすぐに辞任するとい

う事件もあったが、大きな潮流として国粋主義への転換もあり、6年弱しか続かなかった。が、学んだ人々の中には東北学院に進み、ダンスの研究家として名高い山川丙三

郎など、その後活躍した人も少なくなかった。敬和学園高校、大学は北越学館とその女子校である新潟女学館の精神リベラルアーツ教育を復活させた学校で、キリス

ト教学校は全国に102あるが、1度閉校となった学校を復活させたのは新潟だけだ。

勝弥がなぜ北越学館から手を引いたのか。第1回の帝国議会の選挙に当選し、国会議員として東京で新しい生活が始まったこと、それまで赤字を補って来たが、払えなくなったという、やむを得ない事業があったからではないか。

加藤亨氏 地方政治家としての勝弥のライフワークは道路と鉄道の整備だったのではないかと。道路では今の国道7号が県道だった大正期、ライブルでもあった旧朝日村関口の8期当選の県議主導でルートが岩沢橋・中原・関口・早稲田にルート

変更されるという際、旧猿沢村の要請で現ルートにひっくり返している。

ライブルの県議が憲政会所属、勝弥は政友会所属で、わずかの期間で予定ルートが水明橋・猿沢経由に決まったのは、大正7年に政友会の原敬内閣に変わったことがあ

る。このことが後に旧猿沢村役場に勝弥の写真が飾られたり、後の開通後の猿沢での開通式に呼ばれ演説したり、さらに旧山北町の念願だった鉄道(羽越線)の海側開通につなが

った。旧山北町は、11月から4月は海も荒れて汽船もだめ、冬は蒲萄峠も大雪で通れず陸の孤島となったため、鉄道が欲しかった。路線設定では山側ル

ートと海側ルートでも猿沢村側が県道ルート争いで分されたこともあって海側に決まったのではないかと。私の知るかきり鉄道誘致での勝弥の政治的な動きについての記録、証拠はないが、旧猿沢村での県道ルート決定までの記録をまとめた大場沢の郷土史家の資料が手掛かりとなり、小説家の山田花袋が山側推進派の村長がいた北中に2回通って書いた小説『廃駅』の中で推察できると思う。

五十嵐信氏 板屋沢には飢饉の折、邸内に土蔵を作らせ、農民の労力と引き換えに食料を提供した、恐惶で農民の生活が危機に陥ったとき、多額の負債を全額免除した

こと、洪水の時、自らの判断で官林を伐採させ、その木材で堤防を築いたりしたという逸話がある。身近にこういう人がいたということはずいぶとで、混同した世の中でもこういう気概を持って生きていければと思う。

勝弥の研究論文が出ていないのは、自身のやったことを記録に残しておかなかったことがある。時代背景もあるが、キリスト教ということでも、当時石を投げられたこともあったそうだが、笑って道を歩いていたという。2度も刑務所に入ったが、それは信念を曲げなかった結果でもある。母俊子の影響も大きかったのだと思う。